オピニオン

観光地は日常にこそある

映画監督　錦織良成さん

地域で作品を撮る

地方都市でロケする日本映画が目立つ。アニメの舞台を含め、観光客の誘致に成功した例もあり、フィルムコミッション（FC）は各地で設立されている。しかし、映画を作るだけで地域は活性化するのだろうか。ここ10年、郷里の島根にこだわり、そこを拠点に撮り続ける錦織良成監督（50）に聞いた。

（聞き手は論説副主幹・佐田尾信作、撮影・今田豊）

―映画で観光や町おこしを、という発想はお持ちですか。国内では中国人観光客の誘致に功を奏した例もあるようです。

観光や地域振興に映画は不可欠でしょう。映画には人を動かす力があると思います。

でも、映画を単に観光宣伝の道具にする発想は疑問です。地域の本当の良さに気づかないまま発信してもロケ地マップにすぎません。映画が文化の輸出になると考えて国策として力を入れる諸外国に比べ、観光誘致の手段というのはやや寂しい。

―島根3部作には有名な観光地は出てこない。日常の風景の中の普通の人の物語ですね。

はい。山形県でロケがあった「おくりびと」ほどの大ヒットには及ばないにせよ、結果的にどの作品も多くの人々がロケ地を訪れています。「RAILWAYS」はシニア層が口コミでシネコンに詰め掛けました。フランスでも全国公開され、ミシュランの編集者も「知らなかった」と、島根を何度も訪れるようになったそうです。

観光地は特別な場所でなく日常にこそあるのでは、と思います。日本側の薦めるいわゆる「観光地」と海外のニーズはどうもずれている気がします。でも、この現状がぼくの映画を作る原動力でもありますね。

―錦織さんは脚本も書く独立プロの監督。大先輩の新藤兼人さんが亡くなりましたね。

目標の人でした。今やぼくなんて絶滅危惧種です。独立してオリジナル企画で全国公開の映画を撮る人はほとんどいない。

―新藤さんも毎回資金繰りに苦労していたそうですが。

そんな苦労があるからこそ志を貫けるのでしょう。ぼくも昨年夏、出雲ピクチャーズという会社を多くの支援者に起こしていただきました。というのも作品ごとの製作委員会方式だと、スポンサーによって路線がぶれる可能性を捨てきれない。

株主を集め、島根の会社で映画を作る。1作ごとに次作の資金を回収できる仕組みにし、あの監督、あの俳優にファンがついていた良き時代を取り戻せればいいな、と思います。

―映画は東京中心に製作・配給するイメージが強いです。

日本は東京の一等地に撮影所があり、賃料などでコストがかかる割に製作費は大きな作品でも数億円。かたや欧米では撮影所を安くて広い土地に移動させ、コストを下げている。そして日本の何倍も製作費がある。勝てるわけないでしょう。

―製作を支援する側との関係や距離感には苦労しますか。

日本は規制が多い国、という印象があります。「ミラクルバナナ」ではアメリカのスポンサーは企画書と台本を読んで、理念で判断してくれた。日本だと劇場数は、出演者は、経済効果は、と聞かれます。アメリカはロケの条件でも「やってはいけないことだけ」伝えられ、基本的には何でもOK。日本では「やっていいことだけ」です。

―FCが全国各地に生まれていますが。

ぼくも実物の電車を使う撮影では無理を聞いてもらいました。ただし、FCは映画文化を発展させる団体であって、映画誘致の団体ではない。その土地の観光振興に都合のいい映画だけに協力しては趣旨が違ってきます。観光地が中身と関係なく映っていたらむしろ、逆効果ではないでしょうか。

―最新作は隠岐が舞台です。何か刺激を受けましたか。

新作「渾身」の舞台の隠岐はまるでガラパゴスのように古典相撲が生き残り、相撲をとるため若者が仕事を辞めてまで帰郷してくるのに驚きます。

「地方を活性化しないといけない」という発想は逆だと思いました。むしろ早く都会人の人心を活性化しなきゃと、地方から声を上げないといけない。古里を誇りに思わない文化的な疲弊の先に、日本の真の疲弊が待っていると考えるからです。

にしこおり・よしなり　出雲市生まれ。平田高卒業。陸上自衛隊除隊後、映画の道へ。96年劇場公開の「BUGS」でデビュー。島根3部作「白い船」「うん、何？」「RAILWAYS―49歳で電車の運転士になった男の物語」に続いて隠岐を舞台にした「渾身」を製作、今冬公開する。バナナの木から紙を作る実話を基にした「ミラクルバナナ」はハイチロケ作品。「しまね映画塾」の塾長も務める。